

つくりだす喜びを味わわせる学習指導の工夫

横浜国立大学教育人間科学部学校教育課程技術専攻 H21年3月卒
大和市立渋谷小学校 教諭 加藤 隆太



1 主題設定の理由

児童が造形活動そのもののよさを感じつつ、「まずやってみて、できたものから創造を広げていく力」をつけさせたいと思い、主題設定をした。

2 サブテーマ「—まずやってみて、できたものから創造を広げる—」設定の理由

図画工作科では、「何をかこう、何をつくろう」などと考えすぎるあまり、造形活動そのものを楽しむことができない児童がいる。そして、「上手にかけなかった」「つくろうとしていたものができなかった」と感じ、意欲が低下してしまう様子が見られる。しかし、図画工作科においては、表したいことを完璧に表すことができなくても、偶然の結果として思いがけないものが生まれることがある。児童が「うまくできなかった」と感じて、別の視点から捉えることにより、新しい発想や構想が生まれることもある。児童には、造形活動そのもののよさを感じつつ、「まず、かいたりつくったりして、できたものから創造を広げていく力」をつけさせたいと思い、サブテーマを設定した。

3 本年度の実践（研究の経緯）

今年度もさらに多くの実技研修や教材研究などを通して、児童が主体的に課題追求する活動に繋がる手立てについて、研究を深めていくことにした。

(1) 実践①（粘土を使ったシーサー作り）

作品例がたくさんあり、色々な作り方を試すことができた。完成後は、お互いの作品を見て鑑賞した。他の人の作品の工夫や良いところを見ることができ、教材研究に役立った。

(2) 実践②（絵の具の使い方）

色の基本、スケッチ、彩色について、部員が実際に取り組んだ。色の基本では、3原色で13の色を作り、水や絵の具の調整の仕方や水入れ等の道具の使い方を学んだ。絵の具の使い方を指導する上での基本となる知識や技能を確認することができた。

(3) 実践③（消しゴムはんこ作り）

彫刻刀や版画の学習の応用として、消しゴムはんこ作りを行った。小学校では、版木を使っている彫刻刀の学習が中心だが、ゴムという他の素材を試すことができた。

(4) 授業実践

（3年生 にじんで広がる色の世界）

「形や色、方法や材料を工夫する力を培う」ことをねらいとして授業を行った。主題設定にもある「まずやってみて、できたものから創造を広げる」ことを意識した授業を行った。児童は、にじんでできる模様をつくること自体に楽しさを見出し、それらを増やしながら、お話をふくらませ、創造を広げていた。単元の中で、児童は終始「失敗」という概念にとらわれず、楽しみながらかきたい世界のイメージを広げていた。

4 研究授業に向けた工夫と手立て

図画工作という教科の特性は、最終的に作品として形に残るところにあると考える。本題材は、いつもなら失敗と捉えてしまう「にじみ」を「美しさ」と捉え、それらを生かして作品の発想を広げていく題材である。児童には、にじみとつくり方を理解すると同時に、「にじみ」を美しいと感じさせるような出会いをさせたい。そのためは、次のことについて手順を追って提示した。

①いわさきちひろの作品を鑑賞する

題材の導入として、いわさきちひろの作品を鑑賞させる。児童には、作品の中にある「にじみ」を実際に見せたり、馴染みのある「スイミー」の絵を見せたりすることで、にじみを美しいと感じ、「自分も“にじみ”をつくってみたい」という動機づけになると考えた。

②筆洗いの使い方と筆の使い方

筆洗いは数か所に区切られており、その個別の扱い方と水のとりかえのタイミングが重要である。また、絵の具をつけた筆は、ぬるのではなくいつも「置く」という意識が大事である。この場合は特ににじみなので、紙にぬるのではなく、水の面の上に置くようにすることを意識させ、そうすることで混じり合う美しさが増していくことに気づかせる。

題材の導入の際には、クレヨンで囲んだ形の中を水のついた筆でぬらし、水分の多い絵の具をたらし、次に、違う色の絵の具をたらし、初めに垂らした絵の具と交わることでにじみができる。教師が示範し、じわっと色が広がるおもしろさをまず味わわせたい。これらの用

具の基本的な扱いについては、実践の中で繰り返し定着を図る必要がある。

③場の設定

座席を班にし、机を向かい合わせにすることで、自然に同じ班の児童の様子や作品が目に入り、よさや工夫が共有できる。

④切り貼り

第1次でつくったにじみから世界を広げていくために、つくったにじみを4つ切りの画用紙に再構成し、貼って新たな場面の作品をつくるように伝える。第1次でつくったものから広げることができない児童には、無理強いをしないことを伝える。

5 成果

<手立てについて>

①いわさきちひろの作品を鑑賞する

いわさきちひろさんの作品を実際に鑑賞することで、児童の「にじみってキレイ！つくってみたい！」という意欲につながった。作品の中にある“にじみ”を児童に見せることにより、にじみを使った絵の構想を考えることができていた児童がいた。

②筆洗いの使い方と筆の使い方

筆洗いの使い方を確認することにより、「にじみ」をつくる際に、にごった水でつくる児童はいなかった。その結果、にじみをつくることに没頭し、「やった！にじみがつくれた！」と、つくる喜びを感じていた。

筆と筆洗いの仕切りの一か所に同じ色のシールを貼ったことにより、より水が濁るのを防ぐことができた。

③場の設定

座席を班にし、机を向かい合わせにして活動をしたことにより、児童が同じ班の友達に作品の説明をしたり、児童同士がお互いを褒め合ったりしていた。また、授業の途中で児童の作品を電子黒板に映したことで、クラスの児童がどんなにじみをつくっているのかを、全体共有することができた。

④切り貼り

にじみでつくった作品を切り取って貼ることで、どこに置くか、どの向きで置くかなどイメージをふくらませ、作品の構成を考えていた。小さい画用紙に、にじみをかいてから切り貼りすることで、失敗を恐れることなく活動に取り組んでいた。

また、一見失敗と思われるものを取り上げ、「こんなににじみもあるんだね、面白いね」などと教師が声をかけることで、児童自身が失敗（と児童が感じることを）を恐れることなく、自分の想像した世界をかくことができていた。つくりだす喜びを味わうことができていた。他にも「試しにやってみれば」「自分の世界に合うならどんなにじみでもいいよ」「ためしにやっ

てごらんよ」等の声かけも、つくり出す喜びにつながった。

6 課題

○児童の主体性

図工の作品は、「こうでなければならない」ということはない。しかし、今回はある程度にじみを元にして構成する題材である中、ほとんどの児童はにじみを効果的に使って作品を仕上げていた。しかし、中には「にじみはどれくらい使わなければいけないんですか？」と聞いてきた児童がいた。「にじみは〇つ以上つくろうね」と、水たまりの具体的な数を教師側が示すことなく、児童がにじみを使いながら、にじみに親しんで、楽しく意欲的に表現していくような発問の吟味が必要だと感じた。

○夢の世界を思い浮かべない児童への手立て

夢の世界をなかなか想像することができない児童への手立てを考えていく必要があると感じた。その児童が何に困っているのかを確認し、発想の手立てをとることが大切だと感じた。研究授業後に行われた協議会では、「にじみをつくるのが目的であれば、共同絵の具を使用して、4人ほどで作品をかいてみてもよかったかもしれない」という意見が出た。

7 今後の研究

「まず、かいたりつくったりしてみて、できたものから創造を広げていく力」をつけさせたいと思い、「つくりだす喜びを味わわせる学習指導の工夫」という研究主題のもと、一年間研究を行った。研究授業では、「思っていたものができなかった」ということなく、子どもたちはにじみをつくることを楽しみながら、自分の世界をかくことに夢中になっていた。また、研究授業の後の題材でも、「のこぎりで角材などを切ったり、木切れを組み合わせたりすることをたのしむ」ことを通して、楽しく活動する力を培うことができていた。

このテーマでの実践から、児童は失敗を恐れず意欲的に取り組む姿が見られた。自分なりの見方・考え方の先に自由な発想や構想が生まれることを体験できたと思う。

今後のこのテーマを継続して、さらに研究に取り組んでいきたい。

